

メガネの三角形 (MS)*

橋爪大三郎
76-12-25

～ 日常の記号学 ～ (46枚)

コンタクト・レンズの場合2	頁
眼球論もしくは視線論5	
サングラスの場合8	
メガネの三角形12	
偏見の構造19	

近視は、虫歯と同じく、文明の生み出した病であるといわれる。なるほど、老眼（遠視の一種）が、何びとも避けることのできぬ自然的な経過——老化——にともぐく視力の減退であるのに対して、近視は、遺伝的要因と環境的要因とのまだよく知られていない割合によって、限られた人々の間にしか発現しない。近視は、このようにある種の習慣を媒介とするという意味で、「文化的な」ものではあるのだが、あくまでも身体的器官の物理的・生理学的変形にもとづく現象以外のものではないのだ、とも言わなければならない。ここに、近視の境界的な性格が、あらわとなっている。

われわれの文明は、このような視力の調整不全を補整する装置として、光学レンズよりなる眼鏡（めがね）を、使っている。眼鏡は、幾世紀もの昔から利用されてきたけれども、近年、①近視の著しい増加に因り眼鏡が凶況に普及する一方、②光学技術の進歩にもとづいて眼鏡装

* 本稿は、先頃友人瀬尾育生（せおいくお）氏と議論していた所、まったくふとしたいきがかりから想をえたのが最後、例のよくなし癖で、ついついまとめてしまったもの。お目通し下されば幸いです。また、きっかけを与えてくれた瀬尾氏にも、この場をかりて、感謝の意を表させて下さい。
(片割本字×32行=800字)

置が多様化をとげた、という2つの理由からして、いまや注目すべき記号空間を構成するだけの余地を生じてきている。そこで、問うてみよう、どのような記号空間は、どのように記号論的に構造化されているのか？

5 コンタクト・レンズの場合

眼鏡をかけることを嫌がる傾向は、あべの女性において、顕著である。もちろん、それは、男性の側に、眼鏡をかけた女性を嫌がる傾向が存あることと、無関係ではないのであるが——。

かつて女性は、高等教育に接するチャンスが、男性に比して極めて少なかったため、もともと近視の罹患率は、そう高くなかったのかも知れない。そこで、少数の近視女性たちは、あえて眼鏡をかけず日常の不自由を我慢し、顔見知りや往来を識別できず恥をかき異の失態を演ずることを覚悟するか、あるいは、眼鏡を常用して、社会的偏見をあえて甘受し、それに伴う一切の不利益を被るか、いづれかを選ばねばならなかった。しかし、今日においては、事情は根本的に異なっている。コンタクト・レンズの登場が、それである。

コンタクト・レンズは、元来、通常の光学レンズとは視力の補整が不可能なほどの、強度の近視、もしくは、ある種の角膜異常にもとづく視力障害を除去するための医療器具として、考案されたものであった。ところが、コンタクト・レンズの製造技術が進歩し、通常の眼鏡とくらべてもとりにたて高価であるとは言えない程のコストダウンに成功するや、コンタクト・レンズの有する治療効果以外の効用が、たちまちにして商品価値を帯びるに至る。ここに、メガネ空間における第1の対立——在来型の眼鏡とコンタクト・レンズとの対立——が生じてくる。

特定の職種的女性ほどはことに、商売柄、通常の眼鏡

を使用すること、事実上厳しく制限されている。歌手、クラブ・バー・キャバレーのホステス、ウェイトレス、案内嬢、料亭の女将、……などで、眼鏡をかけている人の割合は、きわめて小さい。こうした職種は、ほぼ、いわゆる「木商売」およびその系列に、属している。接客業では、個別対面的な交流自体の価値が顧客の側から求められているのであるが、上のような事実は、眼鏡が、女性が女性としてあるあり方において生じる価値を、損なうものであることを、示している。

一方、男性の場合に、眼鏡をかけることが障害となるような職種をさがしてみると、ボクサー、運動家、俳優など、機能的な制約が問題となる職業にほぼ限定されていることに、気付く。ホステスと対照ある意味で、専ら女性を顧客とする接客業種、ホストクラブのホストが、はたして眼鏡をかけていてはつとまらないのかどうか、興味あるところであるが、残念ながら詳らかにしない。おそらく、さほど支障はないのではないかと思われるが、どうであろうか？

木商売に就く近視の女性は、このところ、ほぼ例外なくコンタクト・レンズを用いている。また、それと並行して、殊に未婚の若年女性層を中心に、コンタクト・レンズの使用率が、近年きわめて急激な上昇をあげた。その主要な動機たる「美容上の配慮」について、いま少し検討してみよう。

なぜ、近眼鏡は美容上よくない効果があるのに対し、コンタクト・レンズはそうではないのか？ まず、近視であるという事実は、このような選択の恣意性の外にあるのだから——もし、近視の効果的な治療法が存在するのなら、誰もメガネなどかけまい——、両者の差異を説明しない。コンタクト・レンズが克服するのは、近視ではないのである。また、視力を調整する機能に関して、近眼鏡とコンタクト・レンズの間に、さしたる差異は

存しないであろう。両者の唯一の相違は、近眼鏡が、近視であることを明瞭に表示してしまうのに対し、コンタクト・レンズは、それと気付かれもしない限り、正常な視力を有する者（正視者）と、区別がつかない、という点に存する。

近眼鏡とコンタクト・レンズとの対立は、それゆえ、近眼鏡と正視者の裸眼との対立へと、帰着する。裸眼が近視に関して無標（non marqué）であるのに対し、近眼鏡は、有標（marqué）である。ゆえにこの第1の対立——近眼鏡とコンタクト・レンズとの対立は、近視者の一群を、このよき有標/無標の2系列に分割するが、この対立は、正視者/近視者の対立が、（殊に女性の）近視者自体の中にもちこまれたものに、他ならない。とすれば、ここでわれわれは、眼鏡をめぐる男/女の非対称性にも、遭遇していることになる。

あれこれの女性がかれこれの眼鏡をかけることに対して、折々下さるうであるう良し悪しの判定とは離れたところで、一種の社会的事実の如くに、男性ならざる女性一般が眼鏡一般をかけることに対する否定的な反応が成立しているとすれば、それは明白な偏見を構成する、と言える。このような偏見は、偏見として、独立に考察するゆえちがあるだろう。ここで、問題は二重である。あるいは、まず、①なに故に、女性だけがことさら容貌的存在であるのか？ および、②なに故に、（近）眼鏡が、反容貌的存在であるのか？ ——以下で、われわれが主要に論じたいのは、この内第2の点、あるいは、近眼鏡にこのような反容貌的な本性を付与している、眼鏡空間固有の構造を、明らかにすることである。

容貌とは、単なるある種の物象そのものではなく、人間の対他的な交流関係の一截相としてはいじめてあらわれざる事象である。それゆえ、眼鏡が、美容上の効果を損なう、という事実は、純美学的な水準に限定されて捉えられて

はならない——そういう議論は、単なるトートロジーを構成するにあてないだろう。むしろ、眼球という器官が身体論上にもつ位置をはかるといふ作業なくしては、充分に解明できないのである。

眼球論、もしくは視線論

♪ ああ、ゆれるまなざし… (小椋佳)

眼球は、人間の日常的な交流活動の中で、他の身体諸器官とは異なつた、ひとつの特権的な位置を占めてゐる。その理由は、何か？ それは、眼球が、光学的な認識器官である、という。眼球の本性に由来するものとして、理解できよう。

言うまでもなく、光は直進する。ところで、眼球は、その構造上、いわゆる黒目の中央部からのみ採光し、他の部分(白目)からは、外光をとり入れることができない。また、人間の視野はそれほど広いものではない上に、網膜上の視神経の感度は、中心部を外れると、極端に悪化する。それゆゑ、たとえ流し目、脇目、等々の技法を駆使したとしても、眼球の向き(黒目の方向)とは別の方向に位置する物体を明瞭に識別するには、相当の困難が伴う。さらに、人間は、カメレオンと異なり、ものを視る場合に、両眼を別々に操作することがまぶできないような仕組みになっており、しかも、両眼が、自動車のヘッドライトのように、ほぼ正面を向いて一線に並んでゐる…。つまり、ある物象に興味をひかれた場合には、その方向に両眼球をむけ、焦点を合わせなければならぬ。このことからして、両眼球の向いてゐる方向を、人は視てゐるのだ、と一義的に解釈することが妥当である、と考えられるようになる。

眼球は、頭部に裸出してゐるから、白目と黒目との対

比によつて、たやすく眼球の運動を観察することができると。たまた、目蓋が眼球を蔽いかくすことがあつても、それは、眼球の不活動を告げてゐることになる。要するに、眼球は、およそ活動中である限り、必ず目に観察可能である——ここに、人が、ありもしない視線なるものを仮構することの、現実的な根拠が存在する。

眼球は、あぐれて、対人的な相互性(interpersonal reciprocity)の器官である。

ある個体の眼球の運動を観察することによつて、人は、その個体が何に注意を集中しつゝあるか、を推測することができる。あるいは、その個体の眼球と、その個体が視つてゐる(である)ものとの間に、視線を仮構するのである。このように言うと、なかには、それは視線は「欲求」、「動機」、「感情」……といった、新行動主義にありふれた仮設構成体の系列となつてひとつかゝるところがなれないでなれないか、と即断してしまふ人も、出てくるかもしれない。しかし、そのとき忘れられかけていたのは、この視線を現に仮構してゐる者自身の眼球の方向が、観察されてゐる個体の眼球の上に向けられてゐること、あるいは、任意の視線をたしかめるに支障して、観察者の視線がまぶ投げかけられてゐること、なのである。とすれば——あらゆる視線が、他の視線にさらされてゐる限りでしか、存在できない以上は——、ひびがえつて、この観察者の視線であら、他の視線に晒されないわけには、いかならないものではない。日常世界においては、観察の特権はありえないから、このように、視線は、完璧な相互依存(mutuality)に、類してゐる。

この事情は、つぎのような例を考えれば、なおさらはつきりあると思う。

ゴッホは、多くの自画像を描きのこした。わけわけは、ゴッホの顔立ちをそれとしてゐるので(あるいは、ゴッホの顔つきを知つてゐた人の判定を信用してゐるの

で)、それを自画像だと考えている。だが、一般に、自画像には共通する特徴がある。それは、(左右が逆になっていることなどを別にすれば)画像の視線が、かならずこちら(すなわち、観る者)の側へと向いていること、である。

光線の性質上、通常の仕方は、人は自身の姿を、ことに自身の眼球を、外部から眺めることができない。鏡は、このようなとき用いられる光学的変換装置である。ところが、少し考えてみればわかるように(とこのより、日常誰しも経験することであるが)、この仕方によれば、自身の姿を正面からしか、とらえることができない。正確には、ここで正面というのは、眼球の正面のことである。すなわち、自身の像の視線は、必然的に観る者の視線と(勿論、方向は逆であるが)びたり一致してしまうのである。(ただし、三面鏡などを巧みに操作すれば、人は自身の姿を、かなり自由な角度からみることも、できるのではあるけれども。)

人が、他人を盗み視るようにして、鏡の中に自らの姿を盗み視ようとする都度、いつも改めて思い知らされるのは、鏡の中の自己という他者との間には、硬直した視線の相互拘束状態以外に、相互交渉の余地があまりないことである。相互性を保証するほかの、相見交すための視線は、実は、ほりがぬのように折れまがった単一の視線でしかない。鏡を介して自己像との間に仮設された相互性は、まがいものなのだ。鏡の中にひと己れの姿をみとめるときの後めたさは、このように押しだされた自己への関係のうさん臭さに由来する。かりそめに自己を客体視したとしても、視線の不毛な相互拘束を脱するためには、自己像を鏡の中からキャンバスにうつしかえてしまう以外にない。どのような自画像の中にも、視ることと、その関係的なあり方——視線——と、の必然的な結びつきを確認した者のひきあがる苦い程枯が、それと

気とられぬ主題として、塗りこめられている。

サングラスの場合

5 近眼鏡は、視線に関して、無関係にしか動かない。近眼鏡をかける、という操作は、裸眼状態を否定し、容貌に、ひとつの指標——近視であるという指標——を付加える、という方向のみに動く変形操作に、あきなかった。ところが、ここにいまひとつ、視線に関する変形と与える一連の眼鏡の系列が、存する。サングラスの系列が、これである。

10 サングラスは、光学レンズを用いておらず、また、透明であるべき部分が着色されている点で、近眼鏡から区別されている。しかし、こうした構造上の特性が、どのような含意を付与する結果になるかは、なお慎重な準備的考察を要するだろう。

今日、サングラスの系列をなす眼鏡には、ふた通りの起源を有するものがあるように思われる。ひとつは、必然たるサングラス(遮光眼鏡)であり、もうひとつは、いわゆる黒メガネである。まあ、前者から、論じてみよう。

20 エスキモーの狩猟者が雪原を活動するとき用いる、雪めがねというものがある。板切れに薄いスリットを入れたもので、これをメガネのようにして装着することにより、白い雪から反射する多量の紫外線から眼を保護しつつ、適度な視野を確保することができる。人間の視神経の適応能力には、限度があるので、エスキモーと同じように、あまりに強すぎる光線に晒されなければならぬ人々——スキーヤー、登山家、パイロット、船員、……—は、同様の機能を求めて、サングラスを常用する。(溶接工の場合には、火花をもよおす意味から、めがねではなく、マスク(面)が用いられている。)セルロイ

ド、ラスチックなどの安価な材質が利用されるに及び、このようなサングラスは、メガネとしての自らの地位を、不動のものとした。

しかし、本来実用的なものであったサングラスは、夏の避暑地や海浜などで有閑階級が用い始めたことから、急速なファッション化の途をたどる。

近眼鏡は、かけることを強制されていたのに対して、サングラスは、任意的である。また、サングラスは、レンズを素材としていないから、造形的な自由の余地がきわめて大きい。これら2重の恣意性に、サングラスのファッション性は、根拠を有している。他方、コンタクト・レンズは、近眼鏡をかけないですむ、という点で、強制を脱しているだけにあきないが、近視者は、コンタクト・レンズを用いるならば、裸眼に戻るわけであって、その結果、サングラスをかける自由を獲得する。サングラスは、たとえかりそめにもせよ、身体諸器官からなる人間の被らざるをえない制約を、忘れさせるはかりのものだ。結局のところ、近眼鏡に対抗するサングラス、コンタクト・レンズは、脱・必然性、ないし、恣意性の拡大において（あるいは、ファッション性との結びつきにおいて）、共通するといえるのである。

このように、サングラスは、ファッショングラスへと連続して行くのだが、ここで、ゆいゆいは、のこる黒メガネのシムボリズムを理解しておかぬばならない。

黒メガネの祖型は、眼帯にあると言えよう。かつて七つ海の海を荒らしまわった海賊どもの意匠は、斜めに紐を結んだ黒の眼帯抜きには、考えにくい。あの時代には、不慮の外傷その他で眼球を失った人々は、黒い布製の眼帯をその上を覆うのが、普通であったようだ。今日も、白い眼帯が、包帯の白と同じく、急性の疾患時に用いられ、再び視力が回復するであろうことを予想させるのに対し、この黒色は、慢性で回復不能の視力障害を、

盲目の暗闇を、暗示する。黒い眼帯は、単に傷跡の醜さを衆目から遮ぎろうという消極的な配慮ばかりではなく、むしろ、視線の不在を表示しようとする積極的意図をそなえている、と考えるべきだろう。盲人が、黒メガネをかけることの、記号論的な根拠もまた、ここに存する。盲人は、自らの視線が不在であると（明視者に）即時に了解されることを、対人関係のあらゆる場で、必要としているのである。

盲人の場合には、視力が喪失されるが故に、視線が不在であり、それを表示するために、黒メガネを着用する、という展開がたどられる。ところが、明視者の場合には、この展開が逆にたどられる。黒メガネは、眼球の運動を観察することも不可能にしてしまうから、さもなくば存するほかだった視線を不在とさせる。しかも、視力そのものは、もとより喪失されていない——。したがって、明視者に用いられる黒メガネは、自らの視線を他者の視野から消し去ることによって、対人的な相互性を根本から破壊してしまうという、仮面効果をもり。この、視線の非対称性は、最近よく見かけられるようになったミラーグラスのハーフミラー構造の中に、最も顕著な形態化をとげている、といえよう。

黒メガネ、あるいは色の濃いサングラスは、仮面効果を必要とする人々に常用される。有名俳優（ファンに気づかれず、人中へ出るため）、犯罪者（手配を受けるため）、CIA要員、等々が、そうである。そのため、黒メガネ類には、それをかける人物は尋常ではない、という派生的含意が生じ、スタマヤスパイ気取りの俗物どもが、それを愛用しはじめた。一方、また、ヤクザやキンポウなどは、黒メガネのもつ威嚇作用をも、最大限に利用しようとする。海賊の黒い片眼帯の有していたであろう威嚇作用は、顔面の刀傷と同様、見る者に過去の乱闘行為を想起させて、凄味を感じさせる、というにあきめだ

ろう、が、黒メガネの不気味さは、それと似てやや異なり、対人状況の中で仮面効果のもつ優位をとことん利用しつくそうとする意思の冷酷さに、起因するように思われる。

以上のように考えれば、おおむねサングラスと総称される種類の眼鏡には、ふたつの契機が結合されていることが、理解されよう。そのひとつは、サングラスの外から内へとやってくる光線を、さえぎる、という契機であり、いまひとつは、内から外へとびていく視線を、抹消する、という契機である。これらは、いずれも、サングラスが、具象的あるいは抽象的な光線を、遠くにさせるという、量的な変換装置であることを示しており、かかる本質が、上の両契機を、サングラスとよばれるひとつの実体の内へと統合的に実現せしめているのだ。とすれば、サングラスを、メガネ空間のなかで、近眼鏡およびコンタクト・レンズと対立させる、一連の素性が何であるかを、理解することができる。これら三者は、いずれも、光線の変換操作子たる点で、共通する。しかるに、サングラスが量的な変換を実現するのに対して、この二者は、非量的な変換——屈折による変換を行う光学レンズを、その本体としているのだ。

眼鏡のさまざまな種別は、そのおのおのが持つ変換の性質によって、類別されるべきものである。ゆえゆえは、そのような意図のもとに、コンタクト・レンズ、近眼鏡、サングラス、の三つの種別をえた。これは、人々を、正視者／近視者／盲人、と類別した場合にえられた帰結である。実は、これ以外にも、遠視者、乱視者、… など、無視せざる人々が、存在する。これらの人々の内、一部には以下で言及する。しかし、話をこみこませないため、および、乱視、老眼などは、近視、正視と併存する現象であるにすぎぬため、ここでこれらに言及することと省略し、先へすすもう。

メガネの三角形

いまやゆいゆいは、眼鏡空間に属するもろもろの項の対立を整理する意味で、メガネの三角形を構成すべきであろうか。その頂点には、コンタクト・レンズ、近眼鏡、サングラス、の三項を、おのおの位置させる。

これら諸項の対立は、しかしまた、必然的に、媒介的な中間項を生みださねばおかない。

まあ、いわゆる度付きサングラスが、近眼鏡とサングラスとの中間におかされるべきことは、当然である。度付きサングラスとは、文字通りには、近視者のために凹レンズを用いて調整したサングラス、の謂である。が、この眼鏡が、もとより単に近眼鏡とサングラスとを機能的に統合したものにほかならないため、如上の関係は容易に逆転してしまうのである。ために、現今の需要の過半は、サングラスを兼ねる近眼鏡、としてのものである。

人は、近眼鏡をかけると同時にサングラスをかけることは、できない。また、この理由によって、近眼鏡を常用することを強いられた近視者たちは、サングラスを装着する自由から、端的に疎外される。これに対する策としては、近眼鏡の上に、同じくメガネ形に切り抜いた着色セルロイド板を重ね合わせる、という姑息な手段があった。しかし、度付きサングラスの普及によって、近視者たちは、完全な報復をとげることに成功する。

実は、私もこの種の眼鏡を用いている者の一人なので、しばしば経験したことであるが、度付きサングラスをかける場合、人は、“そのサングラスには度がついているの？”と尋ねることはあっても、“その眼鏡は、サングラスになっっているの？”と訊くことはない。だいいち、後の質問は、それこそ全くの愚問である。存じながら、その眼鏡がサングラスであることは、一目瞭然で

あるからだ。実際、度の軽い凹レンズは、着色ガラスを用いると、ほとんど度のないガラスと区別がつきにくくなる。かくして、度付きサンガラスとは、一見純然たるサンガラスと見紛うことにより、人が並視者たることを隠蔽し、あるいは、曖昧にある。度付きサンガラスは、このような、近眼鏡の機能性への反撥、および、サンガラスのファッション性への接近によって、両項の中間的位置を保っているのである。

度付きサンガラスの同義項として、その他の極度にファッション化した眼鏡——たとえば、かつて貴婦人たちが手にしていた柄つき手持ち眼鏡がある。

これは、近眼鏡とコンタクト・レンズの中間項が考えられるとしたら、これは何か？ 近眼鏡とコンタクト・レンズとの対立を構成する素性をみなおすことから、考えはじめよう。

常用される近眼鏡は、人相(容貌)の人工的・文化的な変形(artificial transformation)を来すのに対し、コンタクト・レンズは、この対立の中で、裸眼(開口変形)と同致される。すなわち、その眼鏡としての機能は、視線から全く隠されている。一方、近眼鏡の機能は剥きだしであるから、この両項は、機能/無機能の対立を派生させる。

この2連の対立を媒介する中間項は、透通しの眼鏡、あるいは、玉なし眼鏡である。玉なし眼鏡こそ、機能を持たない眼鏡であり、ありえないはずのめがねなのだ。

多くの漫才師たちが用いる(大概はこれ見よがしに黒縁の)めがねが、このような眼鏡である。また、これは、人が、写真や紙幣の人物像に落書きを施すときに常套手段のひとつとして書き加える、あめがねでもある。この、機能を奪われた眼鏡の滑稽感(30)は、何処に由来するの？ この種のメガネは、もはや物存としての眼鏡ではなく、めがねであることの表示そのもの、ひとつの「

号」の如き、純粋めがねなのである。眼鏡が、人相に必然的につけ加える変形作用そのもの、その反自然性(35)が、かかる滑稽感の根源である。

さて、このころひとつ、コンタクト・レンズとサンガラスとの中間にあるはずの媒介項は、どのような眼鏡によっても埋められるはずは、あるまい。そもそも、実際に使用される局面において、コンタクト・レンズとサンガラスとは、何らの対立を生じない(すなわち、両方を同時に用いることができる)から、である。ところが(35)し、相対立する両項の素性を仔細に検討するならば、意外なところに、両者の媒介項を求めうることに、気がつく。

サンガラスの契機のひとつが、視線を抹消する(いわば、眼球を消失させる)ことであつたその一方で、コンタクト・レンズは、正常な視力を回復させると同時に、眼球の自然状態を副次的に維持してしまふ。ところで、黒メガネが、盲人の視力喪失を積極的に表示する試みであつたことと、半対称的なところに、実は、いまひとつの試み——視力の喪失を表示しないための積極的な試み(35)がある。この試みは、眼球の自然状態、すなわち、正視者を装う志向として、あるほかはない。かくして、両者の中間項として位置するものこそ、偽眼である。

偽眼、この人工的な眼球の究極の理念こそ、生ける自然な眼球としての自らを実現することである。偽眼は、ここでも、変装術固有の逆説に苛まれている。哀しいかな、偽眼は、ひとつの視線を有してはいるが、この視線は、固定されてあることにより、眼球の自然状態からは絶対的に区別されるほかはない。偽眼は、このようにして、自然状態たる裸眼からあくまでも隔てられ、かくして中間項たるに甘んじることになる。偽眼は、死んだ視線をもつことで、「正面を向いた斜視」である。あるいは、斜視(やぶにらみ)は、偽眼と裏腹の関係で、裸眼

から盲目（サンガラス）へと出奔した、いまひとつの中間境をなすべきもの、とでも言えようか。

ところで、ゆいゆいは、各人にとって重要な、あるいは特別な祈願を遂えようとするとき、だるまを用いる。禅宗の達磨大師が、存ぜ、このような役回りをするに至ったのかは、この際どうでもよい。肝腎なのは、だるまが、手も足も喪失した不具者である、という点である。彼の両眼さえも、当初は潰れている。そして、まが、片方の眼をいれられることにより、だるまは、生命と威力とをとりもどしはじめ、願いが実現したときには、両眼をそなたに正視者にたちもどるのである。

この経過は、現実人間におこりうる視力喪失の過程を、逆転した順序でたどっている。願望が成就しなかったとき、だるまが片眼のままに捨ておかれるということは、失明という不具が、懲罰（マイナス価値の付与）として観念されていることを、示している。盲目（めくら）、足巻え、跛行（びっこ）、異、一連の変形による不具は、当人を、まったくの反特権的状況へ突きおとすという、不条理な性格を有する。不具であること自体には、いかなる価値も与えがたい。しかし、日常的には、純粋の否定的価値でしかない種類の不具が、人々の幻想鏡の中では、かえって、このような特権的な威力を付与されるのである。それに対するに、同じ不具でも、正視者は、日常的には、教育ないし文化の標識であり、特権的な不具、不純な不具であるから、いかなる場合にも、全面的なプラス価値へと転倒することは、不適当なのだ。

だるまの半眼状態は、ある種の偽眼なのであり、眼球の自然状態と不具とのあいだの、移行形態である。

いまや、ゆいゆいは、メガネの三角形を完成させたことに存る。それを、図示あるとすれば、たとえば、つぎのように示せよう（図1）。

眼鏡の記号空間についての考察を終る前に、これまで

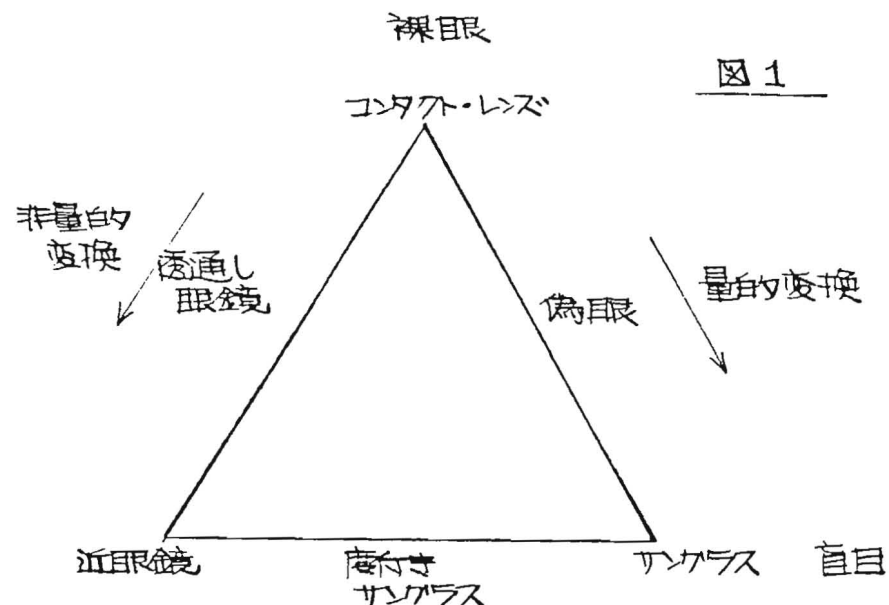


図1

無視した形に存った老眼鏡についても、一言のべるべきかもしれない。

老眼鏡は、眼鏡空間の中で、コンタクト・レンズ、サンガラスのいおれにも対立して、近眼鏡の側に立つ。周知のように、それは、構造上、単に凹レンズの替りに凸レンズを有する、という差異による、近眼鏡と区別されているにすぎないのだから。老眼鏡は、凸レンズが眼球を拡大してみせるため、比較的すぐそれと知られる。

しかし、つぎのような諸点にも、注意を払うべきである。まが、老眼鏡が、水晶体の漸次的硬化、あるいは、眼球のたどる自然的過程の帰結であることによって、老眼鏡は、万人がやがてはかけべきものである。また、老眼鏡は、近くが見えにくくという老眼の特性上、常用されるというより、折に応じて用いられることの多いものである。しかも、近眼鏡が、人をして、近眼者と正視者へと区分する標識たりうるのに対し、老眼鏡は、それを用いているところを目撃されたとして、何らそのような差別をもたらしなない。老人であることは、老眼鏡とが

けていようがいまいが、あくめかることほのだから。したがって、老人が老眼鏡を用いることは、むしろ自然であり、この点でも、近眼鏡忌避のような反応は、生じる余地が少ない。(老眼以外の原因による遠視については、その出現率が低いこともあり、一切論じないでおく)。

にもかかわらず、近視者が老眼となる場合に、話はさらにこまかい、こくる可能性がある。近眼鏡と老眼鏡との中間には、窓つきレンズを用いた、あるいは、2重レンズを用い、外側を着脱もしくは持ち上げる式の、遠近両用眼鏡が、位置するのである。また一歩、老眼鏡とサングラスとの中間には、境い目のない2重焦点レンズを用いた眼鏡が、位置する。この種の眼鏡は、カツラや白髪染め、入歯、その他の手段と同様、対人的交渉の場において、自らの老いを幾分かでも隠そうという意図を実現するための、一種の変装術に属するから、である。あるいは、老眼用のレンズを他者から観察不可能にしてしまおうとする点で、コンタクト・レンズとの近縁性を考えるべきなのかもしれない。

老眼鏡を食めるなら、さきのメガネの三角形は、メガネの四面体へと拡張される。それは、おおよそ、次のようである(図2)。

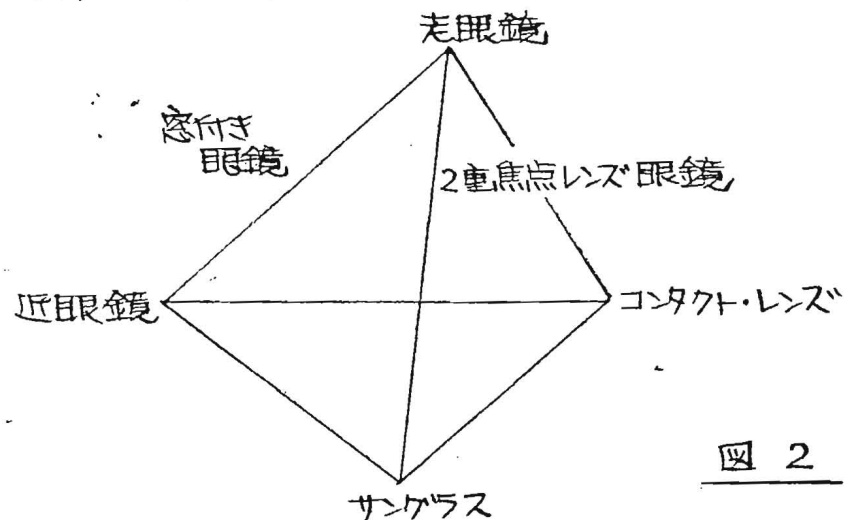


図 2

最後に、慣用に倣って、これら各項の素性を、試みに一覧表にしてみよう(表1)。

表 1

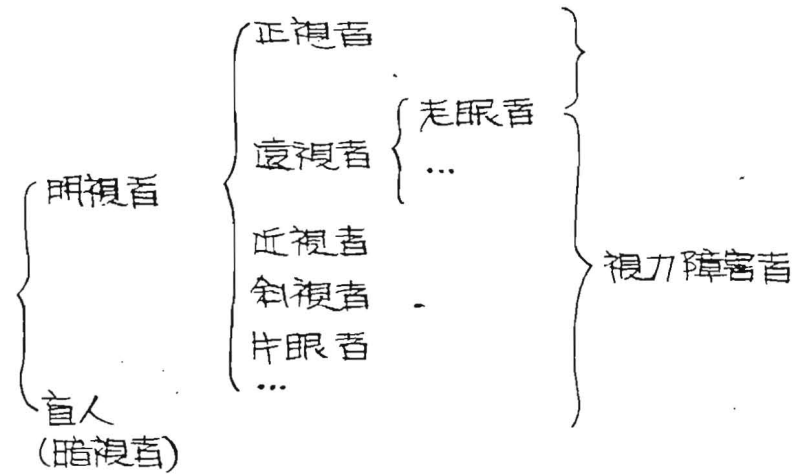
	文化	不具	機能	慣用	観察可能
コンタクト・レンズ	-	-	+	+	-
近眼鏡	+(聴)	+	+	+	+
サングラス (黒メガネ) (サングラス)	+(美)	+	-	+	+
老眼鏡	-	+	+	-	+
	(自然)	(正常)	(装飾)	(慣習)	(観察可能)

(上欄の素性を有するとき、+を付す)

眼鏡空間の構造を考察するときの、わけわけの主張点のひとつは、眼鏡の集合を、単に、いろいろ眼鏡の有る属性を記述し、対立させ、分類整理するような仕方として、メガネの三角形を理解すべきではなからう、ということである。どのような眼鏡の背後にも、それを用いる人々の現実がある。わけわけは、メガネの分類をかりて、実は、人々の身体的諸行為の分類化の一断層のすまを推しはかるうとはかったに他ならない。こうした意味で、眼鏡は、人々の行為を指示するための、指標であった、とも言えよう。

眼鏡がうみだされるのは、それを必要とする眼球が存在するから、である。今までに、さまざまな眼鏡に対応して登場した、さまざまな状態の眼球を有する人々の分類を、ここに掲げておくのも悪くはなからう。(色盲者の如きは、眼鏡による補正手段がないために、メガネの三

角形になにひとつ影響を与えない。よって、除外してある。)



偏見の構造

さて、ここでこの論考をおえともよいが、ついでのこととして、ゆれゆれはぶりだしに戻って、女性と眼鏡との関わりを、問いなおしてみよう。

女性が眼鏡をかけることが嫌われるのは、なぜか？眼鏡に対するある種の疎ましさか、ゆれゆれの日常感覚にしみついているため、ちょっと考えると至極答えに雅作もないように思われるこの間も、実は、よく考えてみると、それほど容易に解けないことに、気付くだろう。それは、本来性差別と無縁である近眼鏡/非近眼鏡の対立の中に、どのようにして、性別が這入りこんでくるのかを、完全に説明しなければならぬから、なのだ。ゆれゆれは、すきに、この点に関する基本的な考えの輪郭をのべておいたが、まず、考え付かれそうな種々の説明とその難点とを、順次みてみよう。

最も素朴な発想によれば、次のように言われようか——とかく眼鏡をかけた女は、性質が悪い。傲岸で、理窟っぽく、冷淡で、気位が高く、おまけに癪が昂りやすく、神経質で、ヒステリー気味で、陰気で、臆病質で、

かと思うとのろまで、鈍重で、内気で、ひがみっぽく、寛地が悪く、執念深く、……、第1、向かいの奥さんも角のたばこ屋のかみさんもそうだし、それにあの江青だって、市川房枝だって、口うるさいのはみは、眼鏡かけてるじゃないか——。

このような思考法を、経験的一般化とよぶことができるだろう。こうした一般化からの帰結としてだけ、女性が眼鏡をかけることに対する嫌悪を説明しようとしても、うまくいはずがな。たしかに、ある場合には、このような一般化(学習による汎化)が生ずる可能性がある。しかし、同様の理由によって、人は、つぎのような一般化をみちびくことも、ありうるのだ——眼鏡をかけた女性は、聡明で(そうだ、料理もうまく)、親切で、心あたたく、教養豊かで、思いやりあふれ、しっかり者で、笑顔をいつも絶やさず、……。

経験的一般化は、諸個人をとりまく身近な女性の具体的なあり方に応じて、さまざまな方向におこりうるにすぎない。したがって、各人がめいめいの個別的経験を一般化する結果、期せずして、眼鏡をかけた女性への反感が一致して生じてくる、とする主張が成立するためには、当然、実際に眼鏡をかけた女性が、信じられているようなよからぬ諸性質をもつという、一般的な事実(ないし傾向性)を、まず前提としないわけにはいかなくなる。とすれば、この立場は、偏見を説明する理論ではなくて、当の偏見そのものである。

第2に考えうるのは、眼鏡が近視である(疵をもつ)ことを表示するため、結婚市場におけるその女性の商品価値を下落せしめることに、原因を見出そうとする立場である。「結婚市場」なるものを想定し、それを、女性の「買手市場」であるかのように考えうるかどうかをさて置くとしても、この考え方には、次の問題がある。すなわち、この²⁰交陪商品論による説明は、女性一般への偏

見の存在を、説明できないであろう。

可能な第3の立場は、いさし洗練されたものである。この考え方によれば、眼鏡が厭わしいのは、眼鏡が女性の魅力を減殺するからにほかならない。つまり、眼鏡は、顔から頬にかけてのなだらかな線、眉の丸み、瞳の輝き、……などを、蔽いかくし、破壊してしまう。従って、眼鏡は、のぞましくもないものなのだ——。この考え方による説明を、美学的説明とよんでおくことにしよう。この説明が、正しい事柄をのべているのを認めるとしても、次のような問いが生じる。つまり、容貌が変形される度合は、男性が眼鏡を使用する際も、女性と同様であるにもかかわらず、なぜ、女性の場合だけが、とりわけ問題とされるのか？

この難点を克服する仕方のひとつは、女性に、男性にはない独自の素性を仮定することである。女性が、たとえば、【+有機的】という素性を有しているとしよう。すると、眼鏡は、ガラスや金属を主たる素材とするゆえの無機質感を、見るものに与えるが、これが、美学教調和を破壊することになる。——なるほど、こう考えると、女性に金歯などが嫌われる理由をも、統一的に説明できる。しかし、ネックレス、指輪、イヤリングなど、女性の装身具は、ほとんど無機物であることの、解釈がつかなくなる。

女性を素性づける仕方は、他にもいくつも考えられよう。たとえば、女性が【-機能的】であるのに対し、近眼鏡は【+機能的】、サングラスは【-機能的】であるとか、女性が、【+自然性】であるのに対し、近眼鏡は、人工物であるから、【-自然性】であるとか、言いうる。だが、おそらく、このように、女性に何らかの素性を仮定するよりも、われわれが先にしたように、女性がさしあたりひとつの容貌的存在であることを前提とする方が、眼鏡怨嗟における男女の非対称性を、のこらぶ

りよく説明できるであろう、と思われる。

女性が容貌的存在であるとすれば、女性は、メガネの三角形のなかで、ひき裂かれざるをえない。女性は、その1つの頂点、サングラスの頂へ、ファッション性を求め牽引される。必然性によって、近眼鏡の極につなぎとめおかれる苦痛……眼鏡に關連して、女性の例で体験される多くの切実な問題は、自らを、容貌的存在として自己規定するその度合に応じているのであり、それはおそらく、シミ、ソバカス、小皺と同質の心痛を、女性に与えるものなのだ。

女性がいかにして、容貌的存在であるのか、その一方、男性はどのような存在として規定すべきか？……これらの重要な問いに答えるためには、性別論、とりわけ、心的性差の理論、および、社会的性差の理論が、どうしても必要である。しかし、これは、もはや、眼鏡の記号空間という本論の主題の圏外にあるから、稿を改めるしかないであろう。

しかし、女性の眼鏡怨嗟を、上のように美学的に説明することは、必ずしも、問題の全幅を開示しない。ここでわれわれは、容貌的配慮の反対の極——社会全体の底部に浸潤している大衆的な反感の存在に、言及しよう。近眼鏡をもって代表される如き、インテリ女性に対するやうがみは、どのようにして生じるのか？

われわれは、先に、だるまの非特権的不具性が、大衆の幻想の中で、ひとつの威力の源泉として、甦ることをみた。それに対して、近視は、特権的な不具であることを、のべたのである。たしかに、眼鏡は、書をよむためのものなのであり、書をよむことは、そもそも、眼球の過剰な能力に属するものである。よって、眼鏡に対する非難は、眼球の過剰な能力(literacy)に対する非難が、容をかるたものなのだ。このような非難の存在自体は、かえって、非難する側に過剰能力の存在——すなわち

、社会構造に根拠づけられた教育格差 (literacy gap) の存在することを、示すものである。知的階層秩序を必要とする社会がうみだす階層差と被抑圧感とは、知的支配層に対する怨嗟のよすがで、眼鏡に見出す。

かくして、近眼鏡をかけた人物は、容易に攻撃の対象となりうる。また、それがとりわけ女性に集中する。教育格差にもとづく現行社会秩序の抑圧メカニズムの圧迫を、日頃もっともななはだしく被る男たちの性急さは、その攻撃の矛先も、つい、恰好の目標として手頃な近眼の女性たちに向けることになりがちである。というのは、本来履さるべき権力の中核へ斬りこむ道のりが、あまりに迂遠でしかないのに較べて、知的女性は、たとえ自らとどのように隔てられた階層に属していようと、とにかく異性であることに依って、想像の中での至近距離におくことが可能であるからだ。近眼の知的女性たちは、裏がえしになったピンナップ・ガールズである。

大衆の、こうした集合的な推論と転移のメカニズムが、偏見装置をなす。メガネの三角形には、眼球の不具が、サングラス (黒メガネ) の表示する偶有的な不具と、近眼鏡の表示する社会的な不具と、この2種類の不具の対立を内包していることが、表示されている。この対立、特権的/非特権的という対立は、社会の知的秩序に発する状況的対立であることが、明らかとなった。

女性が眼鏡をかけることが嫌われるとは、どのような根拠によるのか? われわれは、これまでの考察によつて、その構造を、次のようにみとることができた。すなわち、この偏見は、①女性が向自的かつ向他的に容貌的存在であるという契機、②体制要因としての教育格差が存在するという契機、の交叉するところに生じている。とすれば、当初われわれを捕えた疑問は、いまようやく、この2つの契機を除去できるか、できるとすれば、それはどのようにしてか、を示すという課題にまで、蒸

溜されたのである。

(はしがめ だいさぶろう)

文献

- Katz, J.J. 1966, The Philosophy of Language, Harper & Raw, 西山佑司訳, 『言語と哲学』, 1971, 大修館。
- Lévi-Strauss, C. 1965, 'Le triangle culinaire', L'Arc 26:19-29. 西江雅之訳, 「料理の三角形」, 伊藤見ほか訳, 『レヴィ=ストロースの世界』:41-63. 1968, みすず書房。
- Lyons, J. 1968, Introduction to Theoretical Linguistics, Cambridge University Press.
- 大橋保夫 1972, 「音韻三角形と料理の三角形」, (70リント)。

加批判を、お待ちします。